歴史紀行

# なごや街角今昔

## 【6】 大須…ミスマッチの魅力

池田誠一

### 1 復活した盛り場

大須は江戸時代から長く名古屋を代表する盛り場でした。盛り場という言葉は今ではあまり用いられなくなりましたが、繁華街というよりは歓楽街に近く、いわば大人の遊び場だったといえます。

大須一帯は、元々名古屋城下の南の寺町として計画されました。美濃路(本町通)を中心に、西には大須観音、東には万松寺がありました。そこに寺への参詣の人たちが集まり、付近には芝居小屋や一時期遊廓も出来て一帯は次第に盛り場へと変わっていきました。そして明治6年には遊廓が許可され、様々な娯楽も集中して大須は名古屋一の盛り場でした。

ところがこのような繁栄も大正時代になると少し陰りが出てきました。交通に便の良い広小路沿道や南大津通に人が集中し始めたのです。そして戦後は集客の中心だった映画が駅前に取られ、大須は次第に市民から遠い存在になっていきました。

しかしその大須の街が今、全国でも一番元気な商店街として見学者の絶えない街に再生しました。土曜日曜などは通をまっすぐ歩けないくらいの混雑になります。大須の街には何があったのでしょうか。街角に立って江戸時代からの街の変遷を辿ってみたいと思います。

### 2 大須の街の変遷

#### (1)城下の頃の大須付近

名古屋城下の各街道からの入口には大きな寺町が配置されました。南、東南、東北の3箇所に置かれたことからみると、寺の境内が

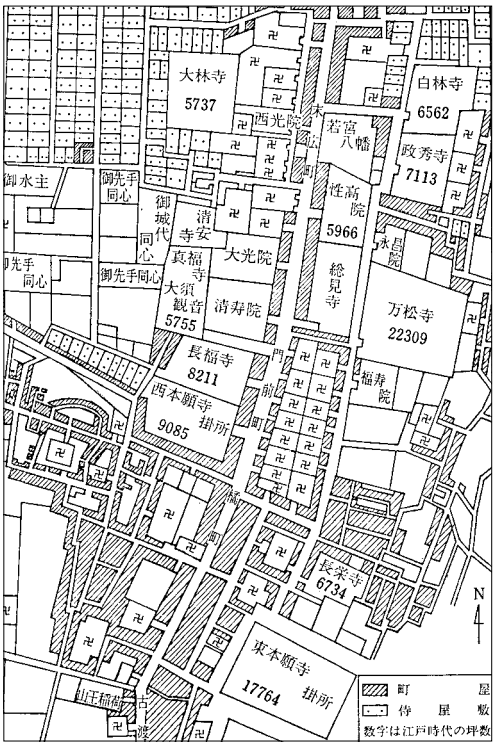


図1　南寺町と各寺の坪数(文献①)

援軍の駐留地に想定されたようです。特に南は東海道を控え最も大きな寺町が設けられました。各寺院は最大の万松寺は２万坪以上で、１万坪、５千坪クラスがいくつもあり、小さい寺でも１千坪を与えられました。（図１）少し遅れた東・西の本願寺もそれぞれ大きな空間を持って配置されています。

大須一帯はこれらの寺への参詣者で賑わいました。特に大須観音と東・西の本願寺別院、それに美濃路を行き交う人も混じって、大須は大変多くの客が集まる地域になりました。付近には芝居小屋が立ち、７代藩主宗春の時には３つの遊廓も出来ました。その後遊廓は廃止されましたが、広い寺の境内には芝居、寄席、見世物など様々な小屋が立ち、大道芸人も現れて大須は次第に大衆娯楽の拠点になっていきました。

### (2)明治・大正・昭和の変遷

明治時代になっても大須は名古屋の盛り場の中心にありました。明治４年京都とほぼ同時に我国で初めての「博覧会」が開催されたのもこの大須でした。６年には観音の北、北野新地に遊廓が許可され、「旭廓」と名付けられました。最盛期には妓楼173軒、芸妓・娼妓1728人を数えたといいます。

ところが明治の終わりから大正にかけて、大須の街に気になることが起こりました。一つは明治40年名古屋の街と熱田を結ぶ幹線道路が、本町通ではなく大須の東側に作られたことです。この広幅員の新道（南大津通）には43年には市電も走り、大須は交通の主流から取り残されることになりました。いまひとつは大正12年に旭廓が中村に移転したことです。大須最大の集客施設が消えてしまいました。

### (3)戦後の大須

そんなことがあっても大須は、戦前はまだ名古屋の主要な盛り場でした。（図２）しかし戦後、遊廓後の集客の中心で、戦前には20館を数えた映画演劇館がその首座を名古屋駅前に奪われました。さらに映画そのものがテレビに取って代わられて斜陽化し、大須には目玉がなくなってしまいました。追い討ちをか

図２　昭和13年の大須鳥瞰図（西を見る 文献②）

けたのは戦災復興の都市計画で出来た広い道路です。西側の伏見通りと北側の百米道路によって街が分断されてしまいました。陸の孤島といわれ、人が集まらなくなった大須の街は昭和30年代の後半から50年代にかけて、火の消えたような街になっていったのです。

50年代になるとこの大須を残念に思う人達が動き出しました。50年の「アクション大須」に始まり、53年からは「大道町人祭」が始まりました。単発のイベントではなく思わぬ商店が立地しました。52年の「ラジオセンターアメ横」です。これまでの客層とは全く違いましたが、このミスマッチが大須に火をつけました。街は若者の街へと変身を始めたのです。

## 3 変遷の跡を追って

それでは大須の変遷の跡を辿ってみましょう。（図３）地下鉄の上前津駅の10番出口を出ます。上前津の交差点から東を見ると新堀川に向けて急に下っているのが分かります。この辺りは名古屋台地の東の端にあたり、江戸時代は風光明媚な所として知られており、暮雨巷など文人の庵がありました。

一本東の広い道を北に進みます。しばらく行き道が右にカーブし始めると左に**清浄寺**が

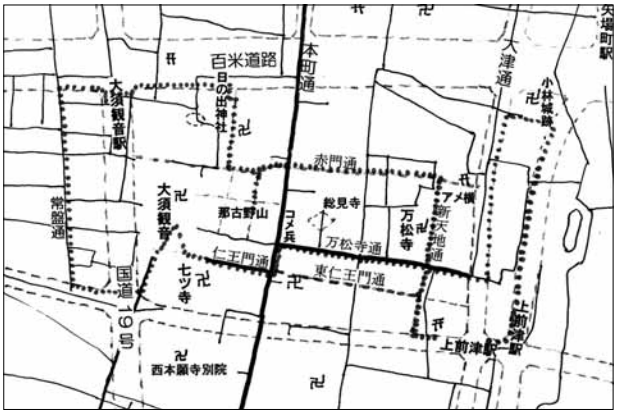


図３　明治20年代の大須と現在（破線）（••••はルート）

上前津交差点から東に下っている道

清浄寺にある小林城主等の墓

あります。ここは大須の街が出来る前、戦国時代に小林城のあった所です。城主は牧長清で信長の義兄弟になります。寺に入った左手にその一族の墓が立てられています。ここは廃城の後、柳生兵庫の屋敷になりました。

矢場地蔵のある寺を西に通り抜けると大津通に出ます。南に歩き、２つ目の信号の一番賑やかな**万松寺通**から大須に入りましょう。昭和35年に出来たアーケード街は人通りでいっぱいです。その間を抜けて進むと若者向けの店やお年寄り向けの店が雑多に並んでいます。全国ブランドになったコメ兵の向こうが本町通です。元の大須はこの通を中心に東西に分かれていました。このため万松寺通はここで終り、観音への参道は少し南の**仁王門通**になります。今では北にある大須観音通に賑わいを奪われそうですが、昔はこの先の仁王門に通じる道が正面でした。当時本堂は東を向いていました。

大須という、地域を代表する言葉になった**大須観音**、正式には北野山宝生院真福寺は、元々今の岐阜県羽島市の大須にありました。1333年に開創されましたが開基の能信上人は学徳高く、多くの書物を収集しました。ところが大須という所は木曽、長良の大河に挟まれた所で洪水が絶えなかったこともあり、その後家康が名古屋城の築城に合わせてここに移させたのです。大須文庫にはわが国最古の、国宝古事記を始め貴重な古文書が保存されています。大須観音の本堂は明治の大火と大戦で焼けましたが、昭和59年に再建されました。

観音の南に**表参道**という通がありますが、戦前はその南の幹線道路に市電の金沢町電停

大須の入り口　万松寺通

縁日でにぎわう大須観音

遊廓のおもかげの消えた常盤通

古墳と大木が街のオアシスになっている那古野山公園

織田家の菩提寺　万松寺

があり、名古屋駅から大須へのアクセスルートでした。通を抜けると今は国道に出ます。西に渡った一本西の道を**常盤通**といい、観音の北からこの辺りにかけて明治時代には遊廓でした。もちろん大正になって中村に移転し、さらに戦災をうけ、区画整理されたので面影はありません。ただ、北に行き百米道路を右に行った国道の西側に成人向けの料亭の跡が残り、国道を東に渡った辺りに風俗系の店が何軒か見られるのがその名残でしょうか。

百米道路を国道から東に2本と少し行くと古墳の跡の小山に**日出神社**があります。旭廓の名はこの辺りが日之出町だったからです。東に出て南に突き当たると**赤門通**です。東に行くと赤門の名になった大光院があり、その正面を南に行くとその先に**那古野山公園**が見えます。この辺りは江戸時代の清寿院の跡で山谷が残った所でした。その跡が明治12年、県で最初の公園、浪越公園になりました。その後公園は鶴舞に変わりましたが今でも小山(古墳の跡)が残された小公園になっています。

大須再生のキッカケとなったアメ横ビル

赤門通に戻り本町通を渡ります。左角には第2アメ横ビルがあり、その先にもパソコン系の店が並んで歩道には若者が溢れています。300㍍程行った**新天地通**で右に曲がるとさらに賑やかになり、左には大須の街の転機を作った**第1アメ横ビル**が、その先の右側には万松寺があります。**万松寺**は1540年信長の父信秀によって建てられ、名古屋城の築城時にここに移されました。裏には近代的な本堂が建ち、斜め向えには再開発のビルも出来ました。

まっすぐ南に東仁王門通の広場を越えると幹線道路で、すぐ左には上前津駅の入口があります。

## 4 守り通せた古き街並

大須の街が再生した理由はいくつか考えられます。まず地元の人々が結集してがんばったこと。次に若者を集客する情報機器店が立地したことでしょうか。

しかしそれだけではありません。大須の街の沈んだ時期のことです。昭和30年代後半から日本は高度成長の時代になりました。所得倍増論に始まり、経済は指数的に伸びました。人口も延び、名古屋の街も膨張し、新しくなりました。そしてバブルになりました。

その間大須は沈んでいたのです。もしもこの時代に注目を集めていれば、今の大須はなく、きれいな普通の街になっていたでしょう。でもそれは大須の魅力ではありません。高度成長期に沈んでいたことが、長い大須の街の歴史を守ることにつながりました。

雑多な店が並び、建物も客も新旧が交じり合うミスマッチの街。それこそが歴史の活きた、他にまねの出来ない大須の魅力になっているのではないでしょうか。

〈主な参考文献〉
①芥子川律治「家康がつくった革新名古屋」(1977、地産出版)
②「日本の大須―今と昔」(1938、大大須振興会)
③大野一英「大須物語」(1979、中日新聞本社)